

満州

満州独立守備第五大隊 ノモンハ ンに生き残る

愛媛県 黒川 盛栄

「ノモンハンの生き残りだと聞きましたが何年徴集
でしたか、満州の国境警備も兼ねて話して下さい。」

私は大正七年九月四日生れですから、昭和十三年徴
集で、現役で十四年三月十七日入営だが、その時はお
う青年学校を卒業していた。内地の部隊へ入ったので
はなく、広島へ集合して身体検査を受けて直接大連へ
行き、独立守備第五大隊第四中隊入隊になった。

大隊は通化省通化にあって、半月ぐらい基本教育を

受け、治安維持のため警備、討伐をしながら訓練をし
た。靴は編上靴ではなく地下足袋だけ、山ばかりだか
ら討伐、鉄道警備、部落臨検などなので靴は履かなか
った。この付近は馬賊がいて、部落を襲撃する。二十
分位の間に物を取って、娘とか若者を拉致（無理に連
れていく）、最後の者が火を付けて焼き払ってしまう。
皆分業でやるので、またたく間にやられてしまう。

満州の冬は半年ぐらいあるので食物が無くなった
り、自分の部落が馬賊に襲撃されると、別の部落を襲
う。食物が無くなれば皆土匪になるという連鎖反応だ。
それで一個分隊ぐらいが分遣して治安の維持をやるの
だが、それが馬賊で、それが土民だかかなか判ら
ぬ。通化省とか間島省など朝鮮との国境付近の頭目は
ヤン司令だったという。

第五大隊の警備地区の通化省あたりの鉱産物は金・銅・鉄・石炭が主で、特に石炭は無煙炭で、奉天省の撫順炭鉱などは露天掘で、マッチで火が付くし、バケツ一杯をストープに入れても残る灰はじゅうのう一杯しかない無煙炭である。

通化市には国策会社で東辺道開発株式会社というのがあった。満鉄の小会社なのか、関東軍の監督下にあったのか知らないが、四キロ四方という大工場があった。苦力というか現地工人が掘った鉄鉱石、石炭、鉄を製錬し、一貫作業で兵器・弾薬を製造している。工員は一万人居るといわれていた。我々の第四中隊のみで東辺道開発の工場も警備していた。そのうえ、他の警備、討伐、治安維持、教育で、休む暇さえない。

鉄道の警備、警乗について話しますが、列車を走らせるには装甲列車を五分前に走らせる。地雷や障害物を排除するためだ。さらに装甲列車の前にモーターカーを走らせる。モーターカーというのは軽四輪車みたいなものでタイヤを外して鉄路の上を走らせる。線路の無い所はタイヤをつけて走るわけ。そうでないと、

列車や線路が爆破されるからだ。

その他に鉄橋の警備がある。鴨緑江の支流だと思いが、二百メートル巾ぐらいのを含めて、鉄橋が五個所ぐらいあったと記憶している。鉄路巡察では夜になると軍用犬をつれて両方から歩いて行く。線路の枕木を枕にして寝ることもある。一日に三回ぐらいだが、列車を走らせることは大変なことだ。それだけではなく、匪賊に山の稜線から狙い射ちされることが多い。

部隊や駅との連絡は電話ですが電線が切断されていることがある。その時は必ず事故がある。普通の戦闘より大変、実戦の方が楽だ。えらい所へ入ったものだと思った。興安嶺に近い所は馬賊だけだったが、朝鮮国境に近い所は共産軍が越境してくる。有名な張鼓峯（間島省琿春県）のソ連軍越境もヤン司令の工作だったといわれている。

ノモンハン事件は昭和十四年八月でしたか、参戦の模様を話して下さい。

私はその後たしか旭川編成の歩兵第八十九連隊から東安の第五軍司令部へ分遣されたと思うが、ノモンハ

ン事件の十四年八月頃、奉天省の四平街から白城子飛行場のそばまでは鉄道で行ったが（ハロアロシアンが終点）その大平原に、満鉄の貨車とトラックが集合していて、そこが兵站基地だったようだ。そこから前線に食糧、弾薬を運ぶのだが、それは輜重隊がやる。

興安嶺では中村震太郎大尉が殺された所の脇を重機関銃の馬をつれて通る。四〇キロ四方には家が無いという所を通るのだ、前線に急がねばならぬので一般の兵隊はトラック輸送だが、私たちは重機関銃隊なので駄馬を連れているため徒歩の行軍だ。現地まで三日三晩、昼夜ぶつ通しで歩いた。終りには、私は歩きながら眠っているで馬が連れていってくれた。

着いた時は日ソ両軍がドンパチャっていた。前線ハルハ河対岸はトーチカと重戦車群がいて、我軍はそれに抵抗していた。ソ連の戦車は五〇トンとか七〇トンとか大きいものだったが少なくとも五百台、多い時は千台もいるといわれた。こちらの稜線が見えると、無数の戦車が攻めて来る、その音は遠くで聞くと蜜蜂がブンブンというような感じだった。

その時、一番恐ろしいと思ったのは火炎放射器だった。蒙古は九月になると草は枯れてしまう。一メートル以上に伸びている枯草に火炎放射器で火をつける。

戦車から三十メートルぐらい火を吹くのだから、壕に入っている日本兵は焼芋のように焼き殺された。「戦車が火を吹く」といっていたら、それが火炎放射器だった。一番初めの頃は出て来なかったのに、終わりの方になって出て来た。何しろ初めてのことで我が軍は判らなかつたが、鹵獲した戦車を後方で関東軍が調べて火炎放射器と判ったという。

—火炎放射器の戦車に対してはその後どのように攻撃したのですか。

火炎放射器が出てからは、これでは駄目だと肉迫攻撃になった。我軍は手榴弾を五発ぐらい持って、夜ジワジワと匍匐前進して、敵戦車の蓋を開け、手榴弾をぶち込んだ。そのためソ軍は夜は戦車を後方に退げて監視兵をつけるようになった。

今度はキャタピラを切断しなければならぬと、決死隊を編成し、監視兵をやっつけ攻撃した。アンパン型

地雷や、竹竿へ携帯爆雷をつけたりし、始めは成功したが、見付けられると火炎放射器にやられて駄目になった。

対戦車速射砲を射っても、ソ連の重戦車は鉄板が厚く、徹甲弾でも跳ね返ってくる。新式の自動砲を持って来たが、弾が到着しないので使えない。そこで対戦車射撃は、運転席の所だけを狙って射って、運転手の眼をやつつけた。他の所をいくら射っても駄目だった。

ソ連と対峙しているが、向こうはトーチカ、こっちは壕、頭を出すとトーチカから射たれるので、十字鍬の柄に鉄帽を被せているとすぐ射ってくる。その位置を脇で見ていて重機関銃を射つ。すると、こちらの重機に対しソ連の狙撃兵が射ってくる。だから我々重機関銃が一番目標にされ犠牲も多い。

トーチカ陣地の後は戦車が沢山いて、蜂の巣をつついたようにダダダと射ってくる。夜は探照燈を点けて照らし、日本軍の接近を警戒している。大和魂だけではどうにもならないわけだ。

ソ連軍は徹底的に機械化されていたが、飛行機は両

軍共幼稚で単葉機だった。ソ連機の速度が速いので、日本のは追い着けないが、急上昇、急降下、宙返り、体当たりをする戦法だった。ソ連機は大きいので行動はにぶい。我々は昼は空中戦を見ている。

前線は補給が無いから弾丸より食料が無い。三日に一回ぐらい軍用犬が握り飯を持って来るだけ、有難いことだったが、それが一個分隊の食料だ。四〇キロ四方人家もない草原で食う物も無い。南方も食料無くて随分苦労した、蛇やとかげを食ったり、野草やタバコカ、木の実で飢えをしのいだとかいうが、ノモンハンには蛇もとかげも鼠もいない。いるものは蚤としらみくらい。葦、茅の根を引っ張って抜き、泥を落して、そのまま噛る。

中隊長も兵隊も食う物が無いから皆同じだった。これではいかぬというので兵站部へ行って米を貰つて来ようということになった。

一度だけだが、馬を連れて後方へ行つた。その時は四十キロ歩いていったのだが、何処に兵站があるのか判らない。稜線の上へ登って、煙を当ててようやく

兵站を見付けた。兵站は後方だったので敵の飛行機からは見つからなかった。

食う物をくれ、と言うと、本部へ行って伝票を貰って来いという。そこで係の兵隊と一緒に行って、くれた。糧秣係は「お前何処から来たか、よう来たな」という。

「食うものをくれ、三日程食っていない」と言ったら石油缶で炊いていた飯を食えという。飯盒の蓋ですくって腹一杯食った。これでやれやれと思った。早く帰らなければならぬが、一線の塹壕の中でも眠っていないし、四十キロ歩いてきたので疲れが一度に出たか、とに角寝た。

しばらくして眼を覚ました。米は貰ったが他に何か無いかと探したら倉庫に牛の缶詰があった。他に何かと思つたが歩哨が廻つて警戒している。そこで動哨が次に廻つて来る時間を計つたら三十分ぐらいいだつた。

その間に他に何か無いかと探したら、アンペラがあり中は何か白い塊がある。帯剣で開けて塩だと思つたら砂糖だった。その塊も持って前線へ帰つていった。

隊では皆喜んだ。一度に食料を食べたり砂糖を食べたので、今度は下痢をする者もあつた。その頃、第二回の総攻撃をすることになったのだが、その直前、急に停戦命令が出て命拾いをした。飯を腹一杯食べ、砂糖を舐めて、これが死出の思い出になるところだった。が運が良かった。

旧駐留地に帰るため部隊は錦県へ寄つて、張学良の大きな兵舎に宿泊した。そこは飛行場もある所で、西安事件の後、張学良が監禁された所であると聞いた。余談だが、今年になってからの新聞に、その張学良が九十何歳で生きているということを聞いて、感慨無量だった。

—その後は何処で勤務したのですか。また除隊は何年頃でしたか。

それから第八十九連隊へ帰り、たしか東安の第五軍司令部に勤めていた。初めは軍司令部の経理部に行く筈だったが、軍参謀の山川男爵から「お前の炊いた飯は美味かつたから経理部へ行かないで良い」と言われ、参謀は「うちの兵隊さんの料理は美味いから」と司令

部の将校を呼び、私の料理を食べさせたこともあった。そんなことで、私は山川参謀に随分可愛がつて貰った。半年ぐらい分遣勤務をして司令部から原隊に帰る時、参謀はわざわざ日本料理で送別会を開いてくれ、皆から集めた饞別を頂いたことを思い出す。

第八十九連隊に帰ったら、「軍直轄の国境警備隊へ行く者は無いか」と中隊長に言われた。中隊長は前の教官でもあったので、密山県の警備隊へ転属した。何しろ山の中の国境地帯（東と南はソ連領）でソ連と毎日睨み合い、兵舎も防空壕みたいなものだった。国境線は、山の中に白樺の杭を五十メートルごとに打ち込んであるだけだが、この時は越境事件や戦闘は無かった。しかし、その間二年近く、女の顔を一度も見ただとはなかった。

いよいよ、現役満三カ年、内地に帰り、旭川の歩兵第二十八連隊（第七師団）で、四月十五日、満期除隊ということになった。しかし、十四日、米機の本土初空襲（ドリウット中佐指揮のB25型機が東京や近県を空襲し、中国大陸へ逃げ込んだ）があり延期となって

しまった。一日違いで残念がっていたら、今度は、除隊どころではない、千島へ行けということになってしまった。これではどうなるかと思っていたら、幸いにも満期兵九〇人は行かずに済んで、四月二十三日やっ

と除隊が出来た。
―黒川さんは先程、聴取り調査の前の雑談の中で、サイパンなどの玉砕者の慰霊祭の話をされていたのですが、再召集は玉砕地だったのですか。

昭和十九年四月に、歩兵第一四三連隊（第五十五師団―壮兵团）要員としてか、近衛第二連隊に再召集になり、続いて、徳島の第四五〇連隊（護土二二七五四部隊）、本土防衛のため新編の部隊に転属となりました。ところが徳島でマラリアが再発、軍医の命令で入院したのだが、退院して帰ったら、教育した召集兵はもう誰もいない。その召集兵達は沖繩へ向ったのだが、途中潜水艦の雷撃で沈没して、十四、五人生き残っただけで皆やられてしまった。西条の今井君は召集で来たのだが、生きて帰ることが出来た。

満州の独立守備第五大隊は、全国から寄せ集めだっ

た。十四年、我々初年兵は関西地方、二年兵は関東、三年兵は東北地方の兵隊だった。満州の歩兵八十九連隊は、第二十四師団(山兵団)で沖繩で玉砕している。現役時代の戦友たちは、サイパンや沖繩で玉砕している。私がもし、徳島でマラリアが再発しなければ、召集兵たちと一緒に沖繩の途中で、ボカ沈を喰って死んでいる。

同年兵や、同じ部隊の戦友たちは、ノモンハンで生き残り、その後玉砕した者が多い。内地で教育した兵隊も、今生き残っているのは四名だけだという。だから私は、生きていく限り、毎年慰霊祭に出席しているのです。

戦争と霊(魂)

静岡県 吉田 峯 康

「吉田さんは徴兵検査でエピソードがあったと聞きましたか。」

昭和十三年八月一日、山梨県南巨摩郡楡沢町立小学校講堂にて晴れの徴兵検査が行われました。一通りの検査が終わり、やがて徴兵司令官の前に立った。その時司令官は検査結果の書類を見ながら一人言のように「二寸二分か」という声が聞こえた。当時は甲種合格は五尺二寸以上であったそうです。

私は司令官の顔を睨み付けながら大声で「司令官殿、山椒は小粒でぴりりと辛いです」と思わず叫ぶように申しました。むずかしい顔をしていた司令官は思わずニッコリ「よし気に入った。甲種合格」と丸型の判を力強く押した。

やがて検査もとどこうりなく終わり、司令官の本日の講評が行われた。種々の話がありましたがおその中で一段と声張り上げて、

「本官は何十回となく徴兵検査を行って来たが、本官の顔を睨み付けて、甲種合格を要望されたのは初めてだ。これからの若者はこの位の気魄がなければならぬ。これ偏えに村長の指導宜敷きにある」

と思わぬところで村長も褒められ、早速村へ電話を